離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達
―奄美大島編―**

金　山　智　子*

Community and Communication Development in Small Islands: Case Study of Amami-oshima

Tomoko KANAYAMA

世界有数の多島国である日本では，現在でも 400 以上にものぼる小さな離島で人々が生活している。本研究は，これまであまり注目されなかった離島を対象に地域コミュニティ形成とコミュニティ・コミュニケーションの発達の関係について探求することを目的とし，2007 年に四つの離島（父島，奄美大島，小豆島，奥尻島）で調査を実施した。現地で地元住民，行政関係者，メディア関係者，地元企業らへのインタビューを実施し，地域の祭りやイベントなどの参与観察も行った。本稿では，すでに報告した小笠原諸島の父島に続き***，奄美大島での調査結果をもとに，島の歴史や島のアイデンティティ形成がいかに地域コミュニケーションの発達に影響しているかを明らかにする。

キーワード：コミュニティ，コミュニケーション，地域メディア，離島，奄美，アイデンティティ
Key words：community, communication, media, small island, Amami, identity

1. 調 査 概 要

(1) 奄美概要

鹿児島の南西には多くの島嶼がある。まず種子島，そして屋久島が現れる。その先に小さな島々からなるトカラ列島が続く。その南西に奄美群島は位置する。奄美群島の先が沖縄諸島である。奄美群島は，奄美大島，喜界島，請島，与路島，加計呂麻島，徳之島，沖永良部島，与論島からなり，奄美大島はその中で最も大きい島である。群島全体の人口は 12 万余り，その約 6 割が奄美大島に住む（平成 20 年 4 月現在）。

暖かい黒潮は奄美の珊瑚礁を育み，そこには多くの極彩色の魚や生物たちが生息する。亜熱帯の奄美大島にはたくさんの森があり，植生や棲息する動物たちは本土とは異なる。アマミクロウサギなど天然記念物に指定された動物のほかに，291 種類もの野鳥がいるといわれる。マングローブの原生林では珍しい生物たちを見ることができる。このように美しく貴重な大自然は，奄美大島の重要な観光資源となっている。

薩摩藩時代から生産されている甘蔗は，黒砂糖や黒糖焼酎などと奄美の主要な農産物となっている。また，1300 年以上の歴史をもつ大島紬も奄美の重要な工芸品である。

奄美群島の行政管轄は鹿児島県である。かつては琉球王国に支配されている時代もあったが，薩摩藩に制圧された後，長期にわたって薩

* 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部准教授
** 本研究は平成 19 年度駒澤大学の個人研究助成を受けて実施されたものである。
*** 拙稿，「離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達―父島編―」『Journal of Global Media Studies』駒澤大学 GMS 学部，2008 年。調査目的や背景についての詳細はこちらに掲載しているため，本稿では割愛する。

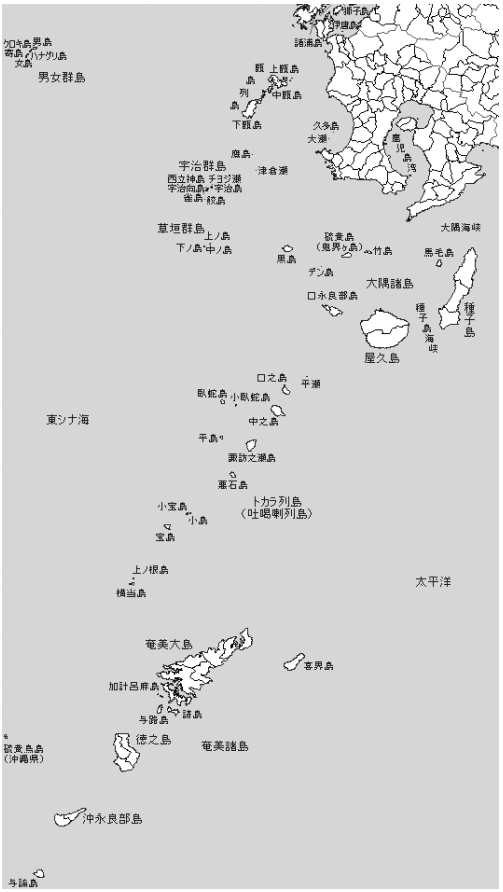

図 1　奄美群島の位置

摩の支配下となる。太平洋戦争の敗戦後には，沖縄同様に米国の統治下となり，返還後はまた鹿児島県の管轄になったという複雑な歴史をもつ。

(2)　奄美大島のメディア環境

奄美大島にはローカル新聞 2 紙（南海日日新聞と奄美新聞）が存在し，これらの新聞は奄美群島に配布されている。ケーブルテレビ 1 社（奄美テレビ放送）やコミュニティ FM ラジオ 1 局（あまみエフエム）といった地域メディアも存在する。奄美大島の五つの市町村（奄美市，龍郷町，大和村，宇検村，瀬戸内町）では，自治体の広報誌（紙）が発行されており，これらはネットでも閲覧することが可能である。

実際の現地訪問によって上記以外にもさまざまな地域のメディアが存在していることが分かった。例えば，瀬戸内ケーブルという小さな地元ケーブルテレビが奄美大島南端の瀬戸内町で放送を行っている。また，親子ラジオというシンプルな有線ラジオもある。後述するが，このラジオは 1951 年に登場したもので，半世紀以上経つ現在も放送を続けている。

現地で一番驚かされるのは，奄美に関する書籍や雑誌といった印刷メディアの多さであろう。これらの地域出版物は自費出版あるいは小さな出版社によるものが多いため，発行部数は少なく，したがって奄美でも入手しにくいものが多い。さらに，奄美を代表する島唄や八月踊りの CD やビデオなども多く存在する。こういった奄美の貴重な書籍や資料は，図書館や奄美博物館などで見ることはできるが，むしろ街の本屋が重要な役割を果たしている。奄美大島の町を歩くと町の大きさのわりに小さな本屋が多いことに気づく。その中でも『本処あまみ庵』は郷土誌関連書籍では並ぶものがないほど充実しており，図書館の書架にも並ばないような希書もあるため，多くの専門家や研究者，奄美に関心がある人たちが訪れる。「こういった奄美の本屋は現在ではかなり少なくなった」とあまみ庵店主の森本慎一郎は話していたが，あまみ庵のような郷土誌専門店も貴重な地域メディアといえるだろう。

事前調査によって奄美大島の地域メディアについてある程度は把握されていたが，実際に現地調査によって想像以上に大小さまざまな地域メディアがあることが明らかになった。そして，これは新たな疑問となった。人口 6 万余の奄美大島になぜこれだけの地域メディアが発達したのだろうか。離島という環境から，自前のメディアが必要であったからであろうか。それとも，父島の調査結果が示すように，コミュニティの発達と何らかの関係があるのであろうか。父島の調査では，地域のコミュニケーショ

ンの発達はその地域の歴史や特異性に大きく左右されることが明らかになった。奄美大島の地域メディアの発達においても，奄美大島の歴史や特異性が影響しているのか。そうならば，どのように影響しているのだろうか。

本研究では奄美大島の訪問調査（2007 年 8 月 28 日より 9 月 3 日）を実施した。正式な被会見者は南海日日新聞，奄美新聞，奄美テレビ放送，瀬戸内ケーブル，あまみエフエム，奄美市役所，瀬戸内町役場，あまみ庵（奄美郷土誌書店）である。それ以外にも，八月踊り，豊年祭り，島唄まつりに参加し，地元の方々へのインタビューを実施した。本稿では，はじめに奄美大島の歴史について概観し，そのあと調査に基づいて奄美大島の歴史と特異性，さらに地域メディアの発達について考察していく。

2. 奄美大島の歴史

一般的に奄美の歴史に詳しい日本人はそれほど多くない。日本の教科書でも奄美の返還程度しか登場しない。我々の知っている日本の標準的な歴史と奄美群島の歴史の流れはかなり異なるし，沖縄諸島の歴史とも違う。

奄美の文化の始まりは，笠利町貝塚の出土品や弥生時代の埋葬跡などから約 6 千年前と推定される。 7 世紀中頃には日本書紀に奄美が登場し，大和朝廷と交流があったことが示されている。この古代の共同体社会を「奄美世（アマンユ）」と呼び， 現代を除いて誰にも占領されなかった唯一の時代であった。徐々に島の有力者である按司（あじ）が，広大な土地やより多くの被支配者を求めて他の集団と抗争を繰り広げていき，「按司世（アジュ）」と呼ばれる時代となり，この時代が 15 世紀頃まで続く。

一方，琉球王国でも勢力争いが激しくなり，15 世紀には奄美の島々を次々に征服し，1571 年の尚元王による討伐で圧勝，奄美は完全に琉球の支配下となる。この「那覇世（なはゆ）」と呼ばれた琉球王府支配時代はほぼ一世紀にわたる。奄美にとって最も辛い時代はこの後訪れる。琉球の従属を丸く治めようとする江戸幕府の方針に対し，薩摩藩は琉球を武力により制圧すると同時に，財政難打開のため奄美大島の侵略を計画した。1609 年 3 月に軍船を出帆し，奄美群島そして琉球が制圧された。琉球は薩摩の支配下に，奄美は直轄地となった。17 世紀初頭から 19 世紀後半までの薩摩藩時代は「大和世（ヤマトユ）」と区分される。

薩摩藩の直轄下となった奄美では，藩の財源確保を目的としてサトウキビの製糖が始まる。奄美支配の強化とともに，1746 年には租米を廃止，換糖上納（米で納める年貢を糖に換算して納めること）が決定され，さとうきびの単作化が進む。自分たちが食べる米や野菜を作ることすら禁じられ，完全な植民地となっていく。1777 年には大島，喜界島，徳之島で砂糖総買入制が出され，すべての砂糖が薩摩藩の独占物となった。島民による密売は打首，サトウキビの切れ端をかじっているだけでも厳罰処分と，この制度は厳しく， この頃の奄美は「黒糖地獄」と呼ばれる。薩摩藩の多大な借金返済の負担が奄美島民に重く辛く圧し掛かったのである。

厳しい貢租は奄美に債務奴隷を生む結果となった。年貢が払えず借財が重なった島民が富豪に身を売る隷属制度で，この隷属者は「家人（ヤンチュ）」と呼ばれ，奄美独特の階層となる。ヤンチュたちは所有主の財物とみなされ，所有主による売買も自由に行われた。借財を返済すれば解放されるが，身請け時の高利子で実際の解放は困難であった。一度ヤンチュになると一生奴隷として働かなければならず，また，ヤンチュの子どもは終身ヤンチュの身分から逃れることはできなかった（名護，2006）。

このような悲しい時代に奄美の島唄が生まれた。彼らが苦渋を紛らわすために，休憩のときや仕事が終わった後に口ずさんだものが始まり

といわれている。代表的な島唄『カンツメ節』や『ウラトミ節』に見るように，ヤンチュとその主にからまる悲惨な言い伝えは事欠かない（島尾，1977）。島唄のシマとは，島ではなく「集落」という意味をもつ。自分の集落の出来事や昔から伝わる知恵などを唄にして心を通わせ，苦しい生活を慰める役目を島唄は担っているといわれる。また，踊りも島唄同様にたいへん盛んであった。多くの伝えたいことを歌にして語り継ぐだけでなく，「踊」として体で表現していた。今でも旧盆の八月に各集落で行われる「八月踊り」はその代表である*1。もともと，過酷な税の皆納を祝ったことが起源で，その年の豊作を感謝して来年の豊作を祈願する「八月御願」と呼ばれた豊年祭が始まりと言われている。「奄美シマ唄の歌謡群の中で……教訓歌，仕事歌，恋歌，祝い歌，などを含め，また「癒し歌」すべてが物語性で形成されていて，その物語性の歌の原点が八月踊り唄」なのである（三上，2007）。薩摩藩は黒糖生産の妨げになると八月踊りを取り締まろうとしたが，その勢いは止められず，さらに代官の本田孫九郎が八月踊りはやめるべきではないと上申して禁止をまぬがれた。奄美大島に遠島された名越左源太が幕末時代の島の習俗を書きとめた「南島雑話」によれば，祭りでは「村中諸作をやめて遊ぶ」とある。祭りの時だけはヤンチュも仕事から解放されたのである（島尾，1977）。

奄美島民は厳しい貢租の他にも酷い差別的待遇や制度に苦しめられた。例えば，本土風の衣服や名前を禁じるなど，習俗がヤマト化することを封じた。島の特権者たちでさえ，薩摩藩に絶大な功労をした者に限り「郷土格」としていささか優遇された程度である。その一つが一字姓の苗字をもつことである。今でも，「麓」「中」「元」「里」「豊」「鎮」「屋」「和」「喜」など奄美島民の中に一字姓の人たちが多いのはここに起源がある。奄美で何世紀も作られている大島紬も「紬着用禁止令」により，薩摩からの役人以外は着用することが許されなかった。また，「南島雑話」によれば，当時の島民はサツマイモを主食としていたが，飢饉のときには野生のソテツの実を食べていた。このような過酷な生活を強いられた島民は当然，一揆，越訴，暴動などで抵抗したが，その結末は悲劇的であった。こういった悲劇は島唄や民謡の中で今も伝えられている（名護，2006）

那覇世（なはゆ）に琉球の女性祭祀組織の末端であるノロが奄美に渡り，奄美の集落全体の祭祀を行うようになった。ノロが公的祭事を司るのに対し，ユタは個人の禍福吉凶を占ったり，死者の意思を遺族たちに伝えたりする，シャーマン的機能をもつ霊能者である。現在も奄美島民にとって個人の悩みを解決するうえで不可欠な存在である。薩摩支配下において，島民懐柔策としてノロやユタは黙認されてきたが，島津斉彬が藩主となってからは，為政者の政策遂行の邪魔であるとしてノロとユタは厳禁となった。島民の精神の拠り所であるユタの否定はその地域の宗教放棄を迫ることを意味し，島民たちは精神的にも完全に逃げ場を失ったのである（名護，2006）。

明治になって薩摩藩が解体され，奄美群島は鹿児島県に属するようになる。しかし，鹿児島県は奄美群島を以前と同じように扱いたがり，すぐには新制度の権利を与えなかった（島尾，1977）。債務奴隷ヤンチュについては 1871 年に解放令が出されたものの，旧態依然とした状態がしばらく続く。明治中期以降になって，鹿児島県は「新たな島差別」ともいうべき施策を断

*1 男女のリーダーが中心となり，即興で相手の歌詞を引用して歌を掛け合う。1 曲目は神迎えの荘厳な雰囲気を漂わせ，2 曲目からは曲調が明るく快適で，歌と踊りも打ち出だしは緩やかで，徐々にテンポが速くなる。終盤では，踊りの振りが追いつけないほどの速さになる。太鼓（チジン）のリズムや歌の打ち出しや掛け合いはベテランでないと難しい。

行する。これが昭和 15 年まで 50 年以上にわたって続く「奄美独立予算」で，内地の産業基盤整備を最重要視し，奄美の産業基盤整備を無視するというものであった。明治 20 年 4 月には鹿児島県大島郡糖業組合規則を県令として公布したが，「島民に便宜を図る近江商人・阿部商会を排除し，鹿児島商人の独占利潤を守るのがそのねらい」であったといわれる（芳・五味，1998）。同 34 年に成立した砂糖消費税法は，沖縄・奄美の農民に砂糖 100 斤につき 1 円の税金を課した。

貧困の上，大正末期から昭和初期にかけての経済不況で奄美は「そてつ地獄」と化した。島民はソテツで飢えをしのぐほかなかったのである。このような状況を救済するため，同年砂糖消費税全廃の嘆願書を沖縄とともに提出，昭和 3 年にようやく国は減税を実施し， 奄美に対する補助金事業が始まったが，経済不況脱出の効果にまでは至らなかった。

1941 年，大戦に突入し，奄美群島は海上交通上の要地として要塞化されていく。戦争が激しくなった 1944 年頃から海上輸送が止まり，やがて終戦を迎える。敗戦により，沖縄や小笠原と同様，奄美群島も米軍の統治下となった。奄美は本土から行政分離され，本土との自由渡行も全面禁止となった。物資や食糧不足の上，1950 年には米軍政府によって食糧が 3 倍に値上げされた。この厳しい統治生活に対し，1951 年に泉芳朗を議長とした奄美大島日本復帰協議会が結成され，島民の日本復帰請願署名運動が始まる。3 カ月で 14 歳以上の島民 99.8％ の署名を集め，祖国復帰運動は盛り上がるが，同時に運動への弾圧も激しく，多くの人々が投獄された。同年 8 月には，泉芳朗が断食による復帰祈願を決行，全群民集団もハンガーストライキを実施した。さらに電報陳情作戦なども実行，これらの復帰運動がマスコミにより全世界に報道され，世論を動かした。結果として，県や政府が動き，1953 年に奄美群島は念願の日本復帰を果たしたのである。

一方，この時期に経済的な道を絶たれた大量の奄美島民が仕事を求めて沖縄に移入した。しかし，治安と風紀維持のためとして沖縄から奄美出身者を追放する方針が米軍から出されるほど，沖縄では奄美出身者に対する排斥が社会化していた。奄美だけが本土復帰したことによってこの差別はさらに顕在化し，在沖縄奄美人に対する差別は他の差別をも凌駕するほど激しいものとなった。在沖縄奄美人は「大島人」と差別され，不当な解雇や離職勧告，財産や既得権益没収，居住権や不動産取得の不可，社会保障制度からの排除など，基本的人権の侵害が組織的そして制度的に行われていった。森 (2003) は奄美出身者に対する沖縄の知られざる差別について，以下のように指摘している。

> この問題の本質は， 米軍政下 〈基地沖縄〉の構築過程において奄美諸島が従属的に編成，周縁化され，同時にその流出労働力が沖縄社会の軍事要塞化の「経済復興」における底辺労働力として収奪された，その抑圧構造の矛盾の表現形態として，シマ社会の排他性の「伝統」が拡大解釈され流用・縫合されたこと，まずここに出発点がある。(p. 324)

日本返還で奄美は永年苦渋を強いられた鹿児島県への復帰を選んだが，大橋 (2003) はこの選択について次のように説明する。

> 近世の薩摩による植民地支配が終わって後も，明治以降は鹿児島県の差別的な政策に永年忍従を強いられ，反鹿児島感情を蓄積しながらも，日本への同化を積極的に進めてきた奄美（人）ではあったが，1946 年に沖縄と共に米軍統治下となり，日本から分離されてしまう。米軍統治下では，一転して沖縄と同一

> の行政区にくくられることへの違和を奄美（人）はいだくようになる。そこで，1953 年に奄美単独で日本復帰を果たすまで，高揚した復帰運動の最中に，シマンチュが日本復帰の正当性として“錦の御旗”として揚げたのは，戦前まで奄美は鹿児島県に属していたという“事実”であった。この時のシマンチュは，東京都や兵庫県，宮崎県に所属してはどうかとの少数意見を放ちながらも，現実として選択したのは，反鹿感情を圧殺しつつ「元・鹿児島県大島郡」に復帰するという結果であった。この心の屈折は，復帰運動の成果の自讃に隠れがちではあるが，奄美民族のトラウマになっているのではないだろうか。(p. 366)

復帰運動では,「私たちは日本人です。大和民族です。母の懐に帰りたい」という主旨の作文や詩を島の小中学生が本土の小中学校へ送ったという（高橋，2005）。そして，日本復帰後は本土への応化が進み,「中心主義」志向が強まっていく。方言禁止運動により標準語を使うようになり，新生活運動により旧暦の年中行事は新暦で行われていった。結果，多くの方言や古くからある行事は消滅していった。沖縄の文化の影響が色濃く残っている沖永良部島では，沖縄か本土かという選択を迫られた結果，自ら固有のアイデンティティに背を向けてしまうことになった。

奄美群島は独自の歴史を歩んできたが，それは過去ではなく現在にも脈々とつながっている。奄美の人たちとの会話で,「鹿児島県と沖縄県が甲子園で試合をしたら奄美の人はどちらを応援すると思うか」という質問を何度となく訊かれた。答えは「沖縄」であるが，その答えの深層にある鹿児島と沖縄に対する複雑な思いは大和人（日本人）には理解しがたい。

> 奄美の歴史もいわば，植民支配の歴史であった。（略）このように，米軍統治の八年間の「異民族支配」を除けば，同じ支配でも国内における「中心」と「周縁」の関係によって常に従属を強いられ続けてきた特異な歴史といえる（桑原，2005, p. 185～86）。

あまみ庵店主の森本は「中世から現代にいたる琉球弧の島々の「分断」「両属」「交換」という目まぐるしい歴史の変遷は，まるでパソコン上の「切り取り」「コピー」「貼り付け」である」と表現する (2005)。

奄美の歴史は，本土と琉球との狭間に喘いだ抑圧の歴史ともいえる。鹿児島や沖縄に対する複雑な思いを抱え，その抑圧の中で奄美独自の文化社会を形成してきたが，その文化に奄美島民が誇りを持ち続けてきたわけではない（仙田，2005）。戦後になっても，奄美に対する差別が残る社会で生活する島民は，奄美出身を隠したくとも，奄美独特の一字姓やシマの言葉，生活習慣などからその出自が分かってしまう。さらに奄美のさまざまな個性を表出することを避けるようになる。そのような中で，島尾敏雄が提唱したヤポネシア論（インドネシア，ポリネシア，メラネシアといった太平洋の島々の連なりの中に日本列島があるという視線）と琉球孤（沖縄，奄美，宮古，八重山）によって多くの奄美の人たちが勇気づけられたことは理解される。同時に，自分のアイデンティティに揺れ続けてきた奄美島民の姿が浮かび上がる。そして，奄美のアイデンティティの模索は現在も続いている。

3.　地域メディアの発達

本土と琉球の狭間に喘いできた奄美社会に多くの地域メディアが誕生している背景が，単に奄美にメディアがない，あるいは少ないという理由だけとは考えにくい。むしろ，奄美の社会や文化，そして歴史と強く関係があると考え

る。ここでは，調査分析に基づいて奄美大島の地域メディアの社会的役割について奄美の文化や社会とからめて考察していく。

(1) 赤土文化と地元紙

敗戦で米軍統治下により太平洋の孤島となった奄美では，奄美大島日本復帰協議会が結成され，奄美の復帰運動が激しくなっていった。精神的にも経済的にも苦しい状況で，文化・芸能はむしろ盛んになり，復帰する間に，実に多くの日刊紙や雑誌が創刊され，新しい民謡や詩なども生まれた。例えば，奄美青年団が発行した機関誌『奄美青年』，大島中学校卒業生らによる機関誌『あかつち』，雑誌『自由』，機関誌『新青年』などはその代表で，小説，詩，短歌，俳句， その他の郷土資料などが掲載された。『自由』誌は，復帰運動に関する内外情勢や日本復帰待望特集号などを出し，復帰運動の言論機関の中心ともなっていた。この当時に生まれた文芸は「赤土文化」あるいは「奄美ルネサンス」と呼ばれる。奄美の復帰運動は，まさにこうした文化興しや自分興しを土台に発展したといえよう（名瀬市誌編集委員会，1983）。その意味において，島の人々が一番エネルギーをもっていたのは，この赤土文化が生まれた時期だったともいわれる（盛岡，2000）。そのほかにも，「奄美文化協会」「奄美芸能協会」が生まれ， その後，続々と劇団が誕生し，その数は名瀬市だけでも 13 にのぼる。薩摩時代の犬田布一揆を題材に解放と自由の閃光を歌った戯曲は，日本復帰を願うシマ人の心をとらえて大ヒットしている（名護，2005）。時代劇や現代社会劇，喜劇など多様であったが，郷土ものの上演は高く評価され，郷土芸能の黄金時代を築いたとさえいわれる。本土との文化・娯楽の隔絶が逆に文化を築く力になった。

『南海日日新聞』はこの時期，復帰運動のリーダーの一人である村山家国によって創刊された。 1946 年から今日まで 60 年以上続いている

写真 1　南海日日新聞社

南海日日新聞は，「赤土の香りのする新聞つくりを目指し，郷土に根ざした地域紙であり，今でも基本的には一面トップと社会面は必ず地元ネタにしている」と編集局長の大野純一は語る。「文化を断ち切られた郷土にあって，新聞は人々からむさぼり読まれ，その報道は祖国の実情とわれわれの行く手を知る，唯一の光であった」（名瀬市誌編集委員会，1983, p. 289）と記されているように，もう一紙の奄美タイムスとともに奄美運動のオピニオンリーダー的存在として重要な役割を担ってきた。当時，集会や言論の自由を与えながらも，実際には言論機関の厳しい統制（米国や軍批判の禁止・検閲・共産主義弾圧など）が布かれていた中で，復帰を目指し奄美で報道を続けた新聞の意義は非常に大きい（黒柳，2005）。ダレス米国務長官の日本返還声明の朗報をいち早く報道したのも南海日日新聞であった。

発行部数約 2 万 3 千（2006 年時点）と，奄美群島全世帯数の 45% をカバーする南海日日新聞は今でも奄美のオピニオンリーダー的な存在である。報道機関としては珍しく，「島のためにならないと判断したもの」に対しては徹底してその論調や方針を貫く。その顕著な例として，1973 年に東亜燃料が宇検村に計画した石油備蓄基地に端を発した無我利道場排斥問題での報道姿勢が挙げられる。また，1993 年に保徳（やすとく）戦争と呼ばれ，機動隊まで出動する事態となった奄美での激しい選挙戦での報道姿勢も多くの人たちの記憶に残っている。

奄美には南海日日新聞のほかに『奄美新聞』がある。2008 年 1 月に社名を大島新聞から現在の奄美新聞に改名した。前社長の邦富則は「奄美群島に配布しているのに大島というのはおかしい」と改名する理由を話していたが，本紙の前身が奄美タイムス，奄美新聞だったことから，奄美新聞にするのが自然の流れだったともいえよう。この奄美新聞（旧大島新聞）は 1959 年に創刊された。その背景には，狭い地域で，政治，文化，経済などについての報道は一紙では偏るため，競争体制を作ってほしいという要望があった。その中でも，特に選挙における新聞の役割は大きい。先に触れた保徳戦争のように，狭い地域での政治対立には新聞二紙のほうが世論形成にとってもバランスがとれる。奄美新聞の販売数は南海日日新聞の半分程度であるが，狭い地域での二紙体制がもつ意味は大きいと邦は強調する。「競争していくことによって偏りをなくす。購読料値上げするにもできない。広告料もしかり。今日は遅いから明日書こうということもできない。競争がないと質の高まりがない。ライバルがいないと伸びない。そういう意味で二紙必要。」これについて，南海日日新聞の大野も「二紙あること自体は悪いことじゃない。切磋琢磨，競争しながらいい紙面を作っていく」と同様の考えを示す。狭い地域における情報伝達だけを考えれば一紙で十分かもしれない。しかし，復帰運動時代の南海日日新聞と奄美タイムスにみるように，新聞が奄美の地域社会で健全なオピニオンリーダーとして機能するには，二紙体制が必要であることを今の奄美の地元紙にも見ることができる。

南海日日新聞の功績は言論報道だけではない。実は文化創設運動に対しても大きな貢献をしてきた。民謡演奏会や新民謡懸賞募集・奄美八景懸賞募集などが例として挙げられよう。日本復帰後，標準語推進運動や新生活運動の結果，奄美の方言や郷土文化が薄れていった。1980 年後半には，島文化の消滅に危機感を覚えた教育者たちによってさまざまな文化継承や保存活動が始まった。今日も続いている地元新聞社による文化支援が奄美文化や社会にとって重要な存在であったことは明らかであろう。復帰以降，優先的に多くの補助金を投入してきた結果，道路や港湾などのハード整備は進んだが，ソフト面の振興は一向に進んでいない。これか

らはハード振興から文化振興へと転換していく必要があると，大野は指摘する。「そのために，オピニオンリーダーとして住民の声を拾いながら出していけるか，どうやって島の文化を後世に伝えていくかということも新聞の役割です」。

奄美の良さを改めて認識するうえで，本土出身の記者の視線は大切となる。奄美新聞では，本土出身の若い記者が多い。地元理解やネットワークという点においては地元出身者に劣るが，一方で，内側から見えにくいものが見えるという点においては強みとなる。本土で出版社に勤めた後，奄美新聞に採用され奄美に移って2年になる高橋記者は，「奄美はお金で買えないものがある島。奄美に今までずっと根づいている伝統，ちょっと見え隠れしてしまっている伝統や，暮らしぶり，人々の生き様などを追っていきたい」と話す。筆者自身，両新聞社を取材した際，逆に取材を受けた。両社の記者に「奄美のどこがいいと思いますか」と質問され，それが新聞記事になっている。すべての記者が地元出身者である南海日日新聞でも，「よその目というのは大事。地元にどっぷり使っていると見えないものがある」と話していた。島外の人たちのレンズを通して自分たちの文化や社会を再認識あるいは再発見することも必要なのだろう。それが自分たちの文化や社会に対する自信につながるのかもしれない。

奄美大島の鹿児島県大島支庁には記者クラブがある。テレビを含め，全国紙，ブロック紙，県紙など14社が入っていながら，報道の多くは台風や自然環境，選挙に集中している。その点からも二つの地元紙の地域での役割は大きく，その存在意識も高い。「琉球王朝に支配されながらも奄美は違う文化が作られている歴史。もちろん鹿児島とは違い，鹿児島に対する反発もある。これだけ島で隔離され，文化も違って言葉も違うとなると，やっぱりそこで育つ文化が地域のコミュニケーションの手段になる。独自精神，メディアが育つ下地がある」と南海日日新聞の大野は話す。赤土文化とともに郷土への強い想いがメディアを育て，そのメディアが自分たちの文化を認識し伝承していくのである。

(2) 集落（シマ）社会と自治体広報誌

奄美大島の五つの市町村では広報誌を発行している。自治体のホームページからも閲覧およびダウンロードができる。一般的に，自治体広報誌は地域住民にとって重要な地域情報源であるように，奄美大島の島民にとっても主要な情報メディアとなっている。おそらく，他の地域と奄美が異なるのは，代々続いている集落（シマ）ごとの結束が今でも強く，それを意識した地域情報の編集が必要なことだろう。特に，2007年に合併した奄美市は笠利町，住用市，名瀬市の三市町からなる。名瀬は奄美の中で最も都会化された地域であり，集落といった意識が低く，名瀬の地域情報はどちらかといえば都市的で個人情報を意識したものになる。しかし，他の二つの地域では今でも集落単位での付き合いが強い。集落ごとに，踊りや唄，地域の慣わしや行事が異なる中で必然的にそういった情報がとても重要になる。例えば，集落では生まれた赤ちゃんは写真や名前をつけて載せないと苦情がくることもある。奄美市役所広報課の里村正力は「どこの誰，といった情報は集落では非常に重要」だと話す。したがって，奄美市の広報誌は，一つの紙面でありながら，地域によって情報の内容や出し方が違ってくる。合併前と同じように，各地区支所の担当者が情報を集めて原稿を作り，それを奄美市広報担当がスペースを調整しながらレイアウトするというやり方を続けている。出来上がった広報誌を見ると地域での内容やレイアウトの違いは一目瞭然である。例えば，名瀬総合支所は特定な個人の記事や写真はない。一方，笠利や住用では，一般の記事の中にも必ず関係者の名前を記載し，住民

に焦点をあてた企画（例えば，シマの人気者など）では住民の名前や顔を多く登場させる。合併後の広報誌の役割としては「同じ市の住民」という意識啓発が重要になるが，奄美では統一意識よりも，笠利，住用，名瀬というシマ意識を今でも大切にしていることが紙面から伺われる。現在の広報誌は自治体情報やお知らせが多いが，今後もっと住民紹介や地域の伝統行事といった情報を増やすことも検討している。

奄美市の合併の際に加わらなかった町村の一つが瀬戸内町である。奄美大島最南端にある1万人の瀬戸内町では，昔ながらの集落単位の情報を掲載している。例えば，住民の誕生祝，結婚祝い，お悔やみなどが含まれる。奄美らしいものとしては，香典返し（社協へ）がある。昔から，故人が住んでいた集落や世話になった集落，そして地域の社会福祉協議会に対して遺族が香典返しという形で寄付をする慣習があり，それを昔から掲載しているのが「香典返し」という情報なのである。これについて，瀬戸内町役場の徳田義孝は，「みんなで助け合うという『結い』という精神があり，そういう善意を町民に知らせたいっていうところからきている」と説明する。奄美や沖縄には「ゆいまーる」という言葉がある。「ゆい」は「結い＝結合＝共同＝協働」を意味し，「まーる」は順番を意味する。シマという共同体社会で相互扶助の精神「ゆいまーる」は今でも大切であり，それが情報として伝えられている。

小さい町ではお互いの顔だけでなく，誰と誰がどういう関係かまで知っていることが多い。また，すぐに兄弟みたいな感覚での付き合いになるのも奄美の特徴である。例えば，知り合うとすぐに姓ではなく名前で呼び合う。年下は呼び捨て，年上の場合は，太郎兄さん（あるいは太郎にい）と敬称がつく。これは会社や役所の中でも普通に行われおり，上司でも山田課長など敬称ではなく，××兄さん（あるいは××にい）と呼ぶ。こういった奄美の兄弟的な付き合いは広報にも表れる。瀬戸内町ではUターンやIターンとして戻ってくる人が毎年いる。広報誌では第一次産業で頑張っている人や，町おこしや地域活性化に貢献している人を積極的に紹介し応援する。その根底には瀬戸内町にもう少し刺激を与えたいという想いもある。一方，町出身者でも鹿児島などで結婚してしまった人の情報は掲載しない。シマは排他的でも閉鎖的でもないが，やはりシマを大切にしてくれる人を一番大切にしたいのだろう。人口1万人の小さな町で16頁もの広報誌を発行し（議会がある場合はさらに6〜8頁増），その中に大小あわせて40枚にものぼるイベントや住民の写真が掲載されている。自治体の広報誌が，集落の人たちをつなぐ大切な情報誌であることは間違いない。

(3)　島唄とコミュニティ・ラジオ

奄美の町を歩いていると，時折，民家や民宿の軒先からラジオ放送が聴こえてくる。これが「親子ラジオ」である。『死の棘』などで知られる作家，島尾敏雄が1955年に奄美で再び生活を始めたときの様子を綴った『名瀬だより』(1977) の中に，次のような一節がある。

> ……ラジオが普及し，その音からもわれわれはのがれることが不可能になった。都会の騒音に疲弊して草深い静かな村々をたずねて行っても，そこにはいっそう傍若無人にかけ放しにされたラジオの音が待ちかまえている。名瀬や古仁屋の町には（多分それは次第に島々の他の場所にも普及して行くだろうが）「親子ラジオ」という聴取形式がはやっている，というより町のすべてはその親子ラジオだといっていい。(p. 54)

「親子ラジオ」は有線ラジオ放送の一種で，巨大なアンテナを備えた「親ラジオ」で本土など

から放送電波を受信し，各家庭に配置した「子ラジオ・スピーカー」に有線で配信するものである。もともとは，戦後の沖縄で米軍政府が考案した「グループ・リスニング・システム」であり，その背景には，米ソ冷戦下でアメリカの極東戦略や計画を沖縄の住民に理解・支持してもらうための広報宣伝の手段を必要としていたことがある（高嶋，2003）。沖縄での親子ラジオの急速な普及に伴い，奄美の名瀬でも大洋無線が軍政府の許可を受けて始めた。新聞以外にトランジスタラジオやテレビがない奄美で親子ラジオが普及するのは当然であった。しかし，普及した理由はそれだけではない。ラジオ放送の内容そのものが島民に強く受け入れられたのである。NHK や琉球放送などからのニュースの人気もさることながら，独自の生活情報や音楽，とりわけ「島うた」などの民謡番組は多くの島民に支持された。当時の南海日日新聞に「最近名瀬市内には親子ラジオが登場，島唄戦後版がジャンジャンかけられている」（高嶋，2003）と記されたように，親子ラジオは島唄を伝える大切なメディアだったといえよう。島唄だけでなく，奄美の方言である島口（しまぐち）を使った番組も多く，標準語化が進む奄美において，島口を維持あるいは獲得するうえでも重要であった。「奄美の他者」である島尾にとっては騒音の源泉であった親子ラジオも，島の人々にとっては重要な情報源であると同時に，島の文化を伝える貴重なメディアだったのである。奄美でもテレビなど他のメディアの普及に伴い，親子ラジオを聴く人は激減したが，現在も数千戸が加入している。

親子ラジオしかラジオ放送がなかった奄美に，新しいラジオ放送が登場した。2007 年に開局したコミュニティ放送の「あまみ FM（ディ！　ウェイブ）」である。もともと，放送局長の麓憲吾が 4〜5 年本土に住んだ後に帰島し，そこで地元の島唄の良さに気づいたことが開局のきっかけとなった。本土で奄美大島の場所や名前さえも知らない人が多かったのが，瀬戸内町出身の歌手元ちとせのデビューによって奄美が知られ，島唄ブームや島ブームで奄美が取り上げられるようになったことが島を見直す機会となった。麓は当時の想いを以下のように語った。

> 内地のメディアでああいう風に映ることで島の人たちが認め始めるっていう構図がすごく嫌だったんですよ。離島であるからかもしれないですけれども，自分たちのもってるものが遅れてて，内地から来るものが新しくて常識だっていう認識がちょっとあまりにも強いなあって。結局，外の方に認められて初めて自分たちの良いものに気づくっていう逆輸入的効果があると思いまして。
>
> 島唄なり，音楽なり，島の言葉なり，そういう活字では伝えきれないものがあるし，結局鹿児島のほうで奄美のことを取り上げてそれで自分たちのアイデンティティを測っていくっていうのもメディアからの影響というか。復帰 50 周年というのもあって島の人たちが島外に発信しようという動きが高まったわけです。けど一番そのときに気づかなければいけないのは，島の人たちが島のこと知らなかったよねっていうのが一番抜けてたことで，そういった把握もせずに島のことをどんどん発信することによって，守るものと得るものとの区別がわかんなくなっちゃうだろうなと感じたわけです。島の人が島のことを知るところから始めたいというのが僕の大きなコンセプトだったんですよ。そういった中で自分たちのメディアが欲しいっていうのがどんどん高まってきた。

島外の人たちから認められて自分たちの文化の良さを認めるのではなく，まず島の人々が自

ら認めることが大事であり，そのためのツールがメディアなのである。「情報を自分から取りにいく人は意識的で意欲的な人たち。むしろ感化しなくちゃいけない人たちはそういった人たちではない，島のきょとんとした人たち。島は車社会だからラジオに可能性があるのではないかと思った」と麓は話す。島の良さに気づかない島民が，ふとラジオのスイッチを入れたときに流れてくる島唄や島口の語りにいいなと耳を傾ける機会を提供する試みだといえよう。これは親子ラジオで島唄や島口が広く島民に親しまれていたこととも相通じるものがあるように思える。

あまみ FM の放送内容は他のコミュニティ・ラジオと一線を画す。例えば，取材当時の朝の放送内容は以下のとおりであった。

7 時　開局したあいさつ
　　本日のゴミ収集地区（行政職員による呼びかけ）
　　島うた
7 時半　ニュース（南海日日新聞よりパーソナリティが選んだもの）
　　奄美市便り（行政職員コーナー。バック音楽は島唄）
　　音楽
8 時頃　地域のイベント情報
　　島の格言（島のお年寄りが島口で語る）

朝 7 時，まるで街頭スピーカーから流れる町内アナウンスのように大きな声で本日のゴミ収集地区情報がラジオから流れてくるのには一瞬驚く。同時に何とも言えない微笑ましさを感じる。アナウンスの後は，まるで何もなかったよ

写真 2　あまみ FM 麓放送局長

うに静かに三味線（サンシン）の音で島唄が始まる。そして，当日の南海日日新聞朝刊から選んだニュースが島口交じりで読まれ，奄美の天気予報が伝えられる。つづいて，奄美市職員による奄美市便りが始まる。あまみ FM は特定非営利活動法人ディ！が運営する放送局で行政と資金的な関係はない。この番組も行政から出稿料をとっていない。当時の番組パーソナリティを担当していた奄美市役所企画部参事の圓順次は行政情報のほかに，「エンさんのワンコメント（ワンは島口で自分の意味）」という独自コーナーを設け，自分が日頃感じたことなどを話していたが，「行政情報だけでは面白くないから，そういうのが混ざってる方が聴くかな」と始めた理由を圓は話していた。島口については，名瀬は本土からのビジネスマンも多いため，行政情報は標準語で話すが，ワンコメントは標準語と島口を混ぜて使う。番組冒頭の挨拶「お元気ですか」や終わりの「今日も皆さん一緒にがんばりましょう」は島口で語る。奄美は兄弟のように名前で呼び合うが，この奄美市だよりも行政職員というよりは「順次兄」の語りのようで親しみが感じられる。圓自身，買い物や飲み屋などで「あの声の人だ」「聞いてますよ」とリスナーから声を掛けられることも多いという。一般的なラジオの編成とはどこか違うことを，普通のラジオ放送に慣れた人々は感じるだろう。「島口が聞けて島唄が聴けて，新民謡が聴けて，地元の NHK みたいな人じゃない島んちゅ（島の人）がきいているから」と圓は言う。まさにこのラジオ局が掲げる「島ンチュの島ンチュによる島ンチュのためのコミュニティ FM」を実現している。

こういったローカルならではの面白さや価値観は，外を向いている限り見えず，自分の地域と向き合うことで気づき，楽しめるのかもしれない。外ばかりを見ていた麓が，内を向くことで自分の文化を面白いと感じるようになった自身の変化について次のように語る。

外に向かっていく面白さや幸せの価値観って，「もっといいもの，もっといいもの」ってキリがないじゃないですか。でも地元と向き合うと，「これでいいんじゃないかな」っていうのがもっとはっきり見えてくるんですよね。面白さとかですね，幸せ・幸福の価値観なんていうものがね。こういうのを大切にしなきゃいけないと思って。青年団と関わる機会があるんですけども，小さい社会の中で，子どもとかお年寄りとかがいる中で，そこと逃げずに向き合って，敬老会のことや集落活動をやりながら，面白さを作ってるっていうのは本当たくましく感じて。僕なんか奄美の中でも町の生まれなんで，そういう青年団なんかと関わって，すごく価値観なんかが変わってきていてですね。田舎なりの潔さとかを目指していけば，オリジナルのスタイルみたいのが，ローカルが本当にグローバルになっていく可能性っていうのがある。島のスタイルっていうのを作っていくにもそういった価値観でものづくりをしていきたいなあというのはすごくありますね。

南海日日新聞や奄美テレビなど，他のメディアからのあまみ FM に対する評価も高い。それは番組の面白さやユニークさ，島唄や島口が聴けることに大きな理由がある。南海日日新聞の大野も「島口を標準語ではなく，英語に訳すコーナーは面白くていつも聞いている」と話す。「FM の存在自体が島の人たちにとって大きいんだなっていうのがわかりますね。若い人たち中心に，車に乗っているときにアンテナを目一杯伸ばして走ってます」と圓も手ごたえを感じていた。

集落ごとに島唄や踊りが違うように，集落の人々もまた多様である。そういった奄美の集落

写真 3　小宿町の豊年相撲祭

写真 4　小宿町の八月踊り

を取材して伝えていくことも，このラジオ局は大切にしている。麓は「集落に行って話を聞くとみなさん自慢話ばっかりするんですよ，その集落の。そういったこと，すごくやりがいがあって。集落ごとで音楽とかも違って，名物おじさんとかもいるので，そういった話とかですね。コミュニティをつなぐネットワークになりたいですね」と話す。小さなラジオ局で多くの集落を回ることは人材的にも経営的にも大変だが，奄美のコミュニティの基本となる集落がラジオを通してつながるとなれば，コミュニティのハブとしての役割は大きい。現在，あまみFMの電波は名瀬を中心にしながらも島全域には届いていない。これから，宇検村あるいは喜界島などさまざまな地域に拠点をつくり，奄美群島をラジオでつなぐネットワークを構築していくことも考えている。NPO法人型の放送局にとっては会員が最も重要である。2008年7月現在で900を超える会員をもつ（企業/店278・個人641・学生12）この小さなラジオ局は，多彩な島文化，そして多彩な島の人たちをつなぐメディアになる可能性を秘める。

(4) 島んちゅとケーブルテレビ

日本でケーブルテレビが普及し始めたのは，1980年後半の郵政省のテレトピア構想によるところが大きい。当初，テレビの難視聴地域を中心にケーブルテレビの導入が相次いだ。奄美大島には名瀬市（奄美テレビ放送）と瀬戸内町（瀬戸内ケーブルテレビ）にケーブルテレビ会社があるが，どちらも難視聴地域の解消のため，1988年に開始された。

奄美大島南端の瀬戸内町にある瀬戸内ケーブル会社では，難視聴解消といっても，放送されるほとんどは自主制作番組である。特にスタジオをもっているわけではなく，「町がスタジオ」と話すように，番組は町や集落で撮影・取材してきたものである。多くが，町や集落での島唄，お祭り，八月踊り，イベントなどの行事であり，

写真5　瀬戸内ケーブルテレビ

女性5名のスタッフによる撮影映像を編集したものだ。瀬戸内町には55の集落があり，そのほかにも岬，海，川，港など，多くの自然があり，こういったものすべてが映像素材となる。

瀬戸内ケーブルがユニークなのは自主制作と番組編成といえる。10時から24時まで，基本的に自主制作による地元集落の島唄の番組をずっと放送している。島唄が流れる背景には集落の自然などが映る。放送と放送の間には地元のさまざまなイベントの映像が入る。一人暮らしの高齢者が増えているこの地域では，島唄を一日中聴いているお年寄りも多いという。「ケーブルで島唄を聞いて思い出しているから安心と，離れた家族からも感謝されている」と瀬戸内ケーブル会社代表取締役の武原正夫は話す。また，後述する奄美テレビでは島唄の放送は2時間程度で，瀬戸内ケーブルに比べると短い。そのため，瀬戸内町から名瀬に移った人たちが島唄が少ないと不満をこぼすこともあるという。

取材の際に見た島唄の映像に関して言えば，ブレがあったり，ピントがあっていなかったりと，決して質の高い映像とはいえなかった。しかし，それほど映像的には質の高くない放送を長時間飽きずに見ている人たちが多いことから，見慣れた風景や行事を見ながら聴き慣れた島唄に触れられること自体支持されているといえよう。ピーク時には2,500世帯の加入者があったが，高齢化によって一人亡くなると一世帯の加入者を失うほど，瀬戸内ケーブルにとっては厳しい状況となっている。しかし，それだけに，高齢の島んちゅにとっては，島の伝統文化を楽しむことができる唯一のメディアなのである。

名瀬で放送を行う奄美TVは1988年，当時電気工事屋であった現社長によって始められた。きっかけはたまたま米国でケーブルテレビが流行っているという記事を見たことであった。放送に関しては全くの素人であったが，難視聴解消だけでなく，「単純に島唄を映像で流したい，島のじいちゃんやばあちゃんをテレビに出したいという気持ちがあった」と奄美テレビ放送専務の山本勝己は話す。

取材当時の加入者は4,500世帯（名瀬の25%相当）で，経営的には6,000世帯を目指している。多くのケーブルテレビ同様，経営的な理由からチャネルの多くはNHKや大手放送局，映画や海外の人気番組などを放送している。放送の割合は小さいが地域メディアとしてのケーブルテレビの役割の一つは地域情報を伝えることだろう。奄美テレビでは平日は4時間程度，日曜は6時間程度，自主制作番組を放送している。「奄美の土地で自分たちが地域のメディアとしてできることは，とことん地元に根ざしたものをやるべきでしょう。その考えは開局から一貫して変わらない」と山本は強調するが，特に老若男女一人でも多くの人の顔をテレビに出すことを意識している。例えば，15年以上続いている「ほっとけトーク」という討論番組（週1回1時間の生放送）では，毎回テーマごとに司会を決め，その人に討論者の出演交渉もしてもらう。島の時事や文化などさまざまなテーマについて，さまざまな人たちが話し合う番組である。

八月踊りや島唄大会，町の主なイベントや祭りなどは取材し放送するが，日々のニュース番組制作に手一杯で，伝統文化を掘り下げた番組を作るには時間や人員が足りない。むしろ島の人たちにもっと焦点をあてていくことが今後重要だと話す。例えば，「島の物産を内地に売る仕組みを作っている人」「島の食材を使って何かを作っている人」「島外に向けて発信している人」「スポーツで頑張っている子」など，地域で頑張っている人たちである。

両親が奄美出身者である山本は，10年前初めて奄美に移り住んだ，いわゆるIターン者であ

る。当時の想い，そして現在の心境を以下のように語る。

その頃，こんなところ人が住むところじゃねえなって思ったのもあって，いろんなことをやりましたけど，別にものに依存しなくてもいいかなって。なんかあるじゃないですか，東京行けば新しくあれができたこれができたって。そのうちそこにいくこと自体が日常になってしまうと，そこに行くこと自体が楽しみではなくなっていくんですね。モノに刺激されないと楽しめないって都会ですごくあると思うんです。そうじゃなくて，例えばこうやって出会ったり，話したりすることであったり，もっと違う人とのふれあいだったりとか自然だったりとか。

よく何もないって言うじゃないですか，島は何もないからねって。違うんですよ。そこから自分が島に行っても楽しめる何かを探す，なければ自分で作ることもできるわけですよ。そういうのが楽しみだったりするわけじゃないですか。だから完成された都会で型にはまった枠組みの中で生きていくっていうのもあるんでしょうけど，こういう何もないところで自分で何か作りたいとか，自分が発想した思いを実現させるとか，できるチャンスがころがっているわけで，そういう意味で面白いと思うんですね，島は。それと島の人って島のことを憂えてる人がいっぱいいるんですね。たとえばある程度の都会でね，市長が誰になるとか議員が誰になるとか，町の現状を嘆いてね，夜な夜な酒を飲みながら口論するとか，そういう場面あんまりないじゃないですか。市長の顔なんか知らないやついっぱいいるでしょうし，議員なんかどうでもいいと思う，選挙になんか行きませんと，町自体興味がない人というか，別にそこを心配しなくてもいいんですよね。でもこっちは違うんですよ。心配して考えていかないと，本当にうまくいくものもうまくいかないというのもあるし，現状にも満足してない層もいっぱいいるわけです。だから酒飲みながら，島はああでこうでと討論するわけです。若いやつから年配まで，次の世代の島のことまで考えていたりもするわけで，このままでいいのかとか，そういう人たちが結構いっぱいいるわけですよ。

原石がごろごろしてるんです，島って。だからもっともっと自分たちのことを，文化だったり言葉だったり食文化だったり食材だったり，もっともっと自分たちで外のことを知れば，俺たちこんないいものを持ってる島に生まれてるんじゃないかと再認識できる。自分たちの島に誇りをもてる。自信を持って外に向かっていけるような発想の転換だったり気づきだったり，こっちが決めつけるんじゃなくて投げかけるものですね。

山本の話はあまみ FM の麓と相通じるものがある。どちらも一度島外にいたことで島の良さに気づいている。それゆえに島の良さに気がつかない島んちゅに歯がゆさを感じ，結果，内に向けて発信する必要性を感じたのだろう。単に地域情報の発信というよりも，島の人たちに島んちゅであることの自信や誇りをもつ機会となるため，島を心配する島んちゅや島で頑張っている島んちゅをつないでいくために，メディアという道具を使っている。

地域の子供，じいちゃんばあちゃんを（番組に）どんどん出していく一方で，今ある島の現実を見たときの問題点とかいろいろありますから，それを提起していく。投げかける番組だったりとか，一体感の生まれるような

番組作りとか，放送作りとか。やっぱり欲しいのは，人と人がつなぎ合って生まれる連帯感っていうんですかね。

4. ま と め

奄美にはさまざまなメディアが存在している。その役割もさまざまである。しかし，共通するのはどのメディアも奄美の文化を伝えること，そして，島の人たちが奄美の文化に誇りと自信をもつことを目指していることだろう。島外の人たちの目に映る奄美は，素晴らしい自然，地域コミュニティの絆，美しい島唄，独特の踊り，美味しい黒糖焼酎など，羨ましいほど独自の文化や社会である。それだけに，本土返還されて半世紀以上経つ今もアイデンティティを模索している奄美の姿は他者の目には不思議に映るかもしれない。しかし，奄美の人たちにとって，薩摩と琉球という二つの政治や文化圏の狭間で長く喘いできた歴史は，奄美の文化を誇り，奄美のアイデンティティをつくることさえ許されない過酷なものであったと言える。奄美を感じることが，唯一，できたとすれば，島外の人たちのレンズ，あるいは，島外のメディアを通して，自分たちを見たときだっただろう。言い換えれば，奄美が「自己を確認・検証するために常に他者という鏡像を必要とし，そこに映ったあくまでも似姿でしかすぎない「自己」を実装と思いなしてきた」（大橋，2003, p. 348）帰結なのである。

しかし，他者という鏡像の前にたつ奄美の人たちは主体ではない。大橋が指摘するように奄美が自己のアイデンティティを確立するには，奄美の人たちが主体となることこそ必要とされる。あまみ FM の麓がラジオを立ち上げたのは，「他者の目という鏡を見ないと自分たちを認められない構図」に嫌気がさしたことが原因であった。他者の目でもなく，他者の口でもなく，他者の耳でもなく，自己の目・口・耳で奄美のアイデンティティを見出すための装置してメディアが必要とされたのだとも言えるだろう。

奄美のアイデンティティの模索は，人々が奄美の文化を感じることから始まる。メディアを通して，自分たちで奄美の文化に触れ，それを認め，誇りに思うことが，第一歩なのかもしれない。奄美にあるのは島唄だけではない。その母胎は八月踊りや豊年祭といった豊かで多彩な文化にある。奄美では自分の集落の唄や踊りを「わきゃシマぬ宝（私の集落の宝）」と呼ぶ。シマにとってかけがえのない文化なのである。高齢化が進み，祭りの規模が小さくなったところも多い。最近では保存会をつくり若い人たちや集落外の人たちに踊り方や歌詞を教えている。他の集落から人を呼び，シマの祭りを知らない都市部の人たちを巻き込み，島外にいる同郷人をよび，筆者のような島外の人たちの参加を歓迎しながら，シマの祭りを維持・継続しているところも多い。メディアは「シマぬ宝」を伝え，記録していく役割を担っている。

分かれば分かるほど，前の世代が残してくれたものに対して感謝しますし，やっぱり僕たちも僕たちの次の世代のために，っていうところで島の中で過ごしていかなければいけないなと。僕たちは生まれたところに帰ってきたわけだから，ここで育ってきたことの意味を考えなければいけないなというようになりますよね。

あまみ FM の麓の言葉は，文化は継承するだけでなく，これまで築いてきた文化を土台に新たな文化を創造していくことも必要であることを示している。島のメディアはそれに挑戦するための手段でもある。

南海日日新聞は『月刊奄美』というタブロイド版（カラー 16 頁）の情報紙を発行している。

島外の奄美出身者が定期購読しており，内容はすべて奄美の情報となっている。例えば，連載「シマ唄の伝承者」「奄美のトラさん」「あまみ集落探訪」や，特集「長寿の島のなぞを解く」など奄美満載である。島外には奄美出身者が作る奄美同友会が多く存在する。中には，東京奄美会や関西奄美会のように島民数よりも大きい組織もある。月刊奄美では島外で行われている奄美関連イベントや活躍する奄美出身者も多く取り上げる。島外各地で踊られる八月踊りを見るだけで互いに「わきゃシマ（シマの心）」を感じあえる。島内外の奄美人を結びつけるのもメディアの役割である。

2008 年 4 月，東京新宿の全労済ホールで「第八回夜ネヤ，島ンチュ，リスペクチュッ!!」というコンサートが開催された。主催はあまみ FM で，開局 1 周年を記念し，局の中継も行なわれた。総勢 30 名を超える奄美の歌手たちによる島唄は 1,000 人もの聴衆を 5 時間魅了し続けた。聴衆の 6 割は奄美出身者で残りは島外の人たちであった。これまで鏡であった島外の人たちと，映された似姿であった奄美の人たちの姿はなく，奄美文化と人のパワーに飲み込まれ，奄美にいるような感覚の中で，島唄に酔いしれる一つの塊りがそこにはあった。

元ちとせのデビューで一気に火がついた島唄ブームはいつか冷めるとしても，島の価値を再認識し，自信を取り戻すきっかけになったことは確かだろう。若い世代を中心に，時代に合わせて変容しながらも島唄の継承者は増えている。それはメディアも同じであろう。奄美の地域メディアは奄美の文化があるからこそ存在しうる。奄美の文化を伝えながら，新しい文化を創造する力になるのも，また，メディアである。そのことに気が付き，奄美のメディアは新たに息づき始めたようにみえる。まさに鶴見俊輔 (1999) がいう「まきちらされる文化」かもしれない。

> 文化は何かによって，まきちらされているところのものである。まきちらされることなしに，各人のたましいの中に，自然にしっかりと育つものではない。
>
> （略）文化は，実は，それがまきちらされる手続きを含めて，はじめて文化となるのだ。文化はまきちらされることによって文化となるのだ。その文化が，また新しくまきちらされることによって，文化の更生と存続が行なわれるのだ。(p. 119)

奄美の人たちが奄美の文化をまきちらし，まきちらされた文化が奄美の人の中で育ち，存続され，そして，新たな文化を育てる。それが奄美の地域メディアの役割だと考える。

参考文献

奄美三昧「奄美の歴史」http://amami.vqj.jp/history.html（アクセス 2007 年 6 月）.

あまんゆ編『奄美の島々の楽しみ方』（双葉社，2007）.

大橋愛由等著「奄美――〈島尾の棘〉を抜く」西　成彦・原　毅彦編『複数の沖縄ディアスポラから希望へ』人文書院，2003. 3.

鹿児島県奄美大島の歴史と文化 http://www.sh.rim.or.jp/~misshie/amami.htm（アクセス 2007 年 6 月）.

黒柳保則「奄美群島の分離による地域の政治的再編成と政党」『奄美戦後史揺れる奄美・変容の諸相』鹿児島県地方自治研究所編（南方新社，2005）.

桑原季雄「奄美開発再考」鹿児島県地方自治研究所編『奄美戦後史揺れる奄美・変容の諸相』（南方新社，2005）.

世界飛び地領土研究会「奄美群島」http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Lake/2917/japan/amami.html（アクセス 2007 年 6 月）.

島尾敏雄『名瀬だより』（農山漁村文化協会，1977）.

仙田隆宣「「奄美を語る会」が語ってきたもの」鹿児島県地方自治研究所編『奄美戦後史揺れる奄美・変容の諸相』（南方新社，2005）.

芳　即正・五味克夫監修『鹿児島県の地名』日本歴史地名体系 47（平凡社，1998）より抜粋奄美（あまみ）65～78 頁.

高嶋正晴「親子ラジオと島うた」西　成彦・原　毅彦編『複数の沖縄ディアスポラから希望へ』人文書院 2003. 3.

高橋孝代「沖永良部島の戦後史から現在をみる」『奄美戦後史揺れる奄美・変容の諸相』鹿児島県地方

自治研究所編（南方新社，2005）.
鶴見俊輔『限界芸術論』（ちくま学芸文庫，1999）.
名越左源太『南島雑話 1―幕末奄美民俗誌 (1)』（平凡社，1984）.
名越左源太『南島雑話 2―幕末奄美民俗誌 (2)』（平凡社，1984）.
名越　護『奄美の債務奴隷ヤンチュ』（南方新社，2006）.
名瀬市誌編集委員会『名瀬市誌下巻』（名瀬市役所，1983）.
松下志朗『近世奄美の支配と社会』（第一書房，1983.7）.
三上絢子『八月踊り歌にみる意義と物語性』「榕樹」23 号 (2007) http://www.maroon.dti.ne.jp/yosino918/23074.htm.
森　宣雄「越境の前衛，林義巳と「復帰運動の歴史」―歴史記述と過去のはばたき・きらめき・回生―」西　成彦・原　毅彦編『複数の沖縄ディアスポラから希望へ』（人文書院，2003. 3）.
森本眞一郎「島尾敏雄の帝国と周縁―ヤポネシアの琉球弧から―」日本社会文学会篇『社会文学』第 21 号（不二出版，2005. 4）.